

—第24回 気象講座「新しい気象」—

気象講座雑感

日本気象協会北海道支社 中田 琢志

第24回気象講座「新しい気象」は、去る8月1・2日に開催され、25名の受講者に参加いただきました。

今年度も、熱心な受講者に恵まれ、盛況のうちに無事終了しました。今回が初めての遠友学舎での講義と久しぶりの低温科学研究所の見学も好評でした。

1日目は、札幌市青少年科学館で「天気予報のできるまで」（講師：札幌管区気象台技術部予報課長 松村崇行氏）、「雲のできるまで」（講師：北海道大学低温科学研究所教授 藤吉康志氏）の講義と館内見学を行いました。

松村講師は、気象庁で天気予報が出されるまでの過程について、予報現場で用いられている最先端の技術についてお話されました。様々な種類の観測データが、「データ同化」という過程を経て予報値として出されるまでの過程をわかりやすい図表で説明していただきました。多くの質問が出され、受講者の関心の高さが伺えました。

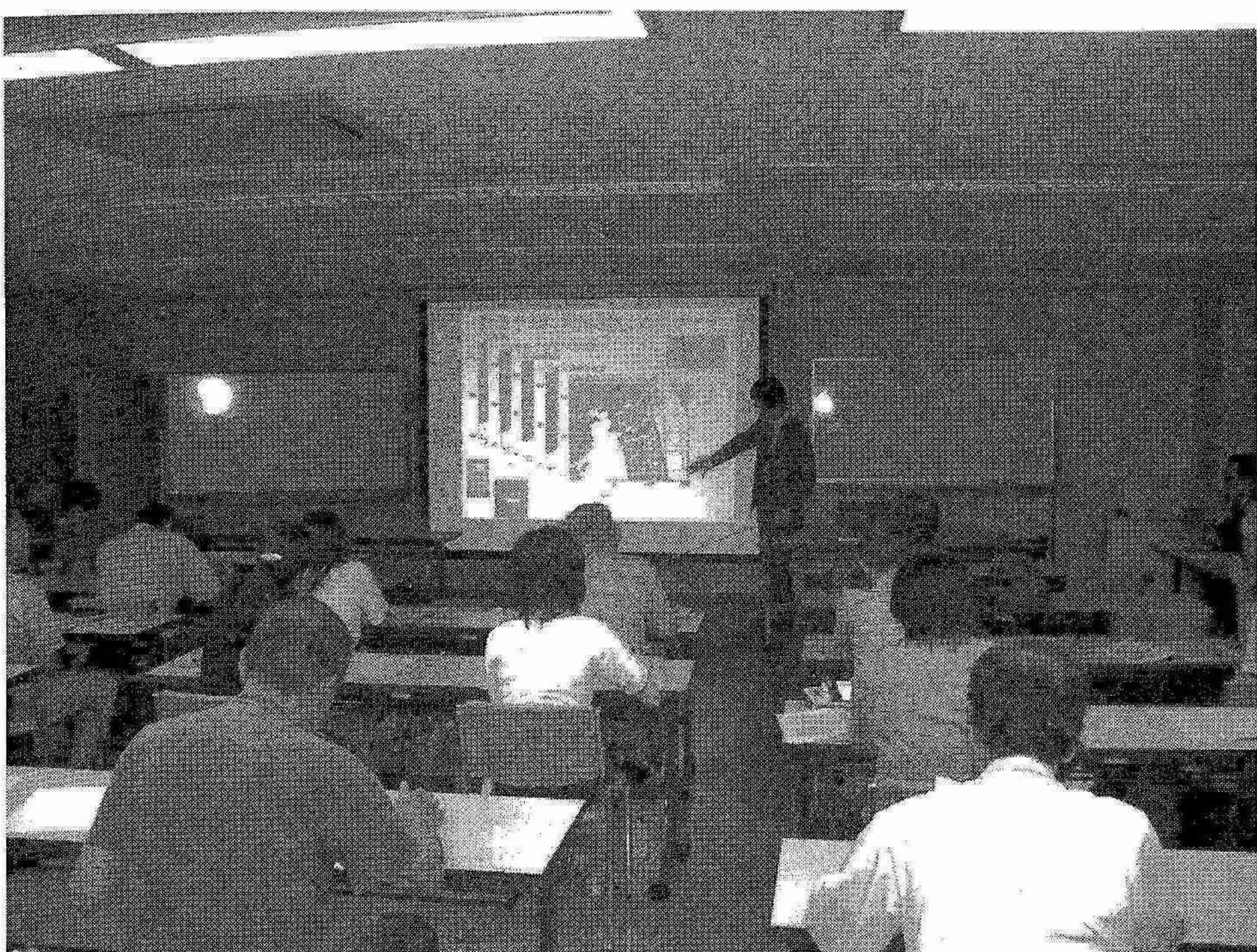
藤吉講師は、「雲」の漢字の由来と、雲のできる科学的な過程について、興味深くお話をされました。雲をつかむ手法として、長大立坑で人工的に雲を作つて観測した話題は、スケールの大きさに圧倒されました。雲は、気流構造を可視化するものとされていますが、ドップラーライダーの観測結果から、目にみえない大気構造の奥深さに感動させられました。

2日目は、北海道大学遠友学舎で「海洋の植物プランクトンと鉄が語る地球環境」（講師：北海道大学低温科学研究所助教授 西岡 純氏）、「海氷—どこで生まれてどう動いているかー」（講師：北海道大学低温科学研究所研究員 木村詞明氏）の講義を行いました。

西岡講師は、近年問題になっているCO₂による温暖化に関わる、海の植物プランクトンについてお話をされました。それには、鉄がキーポイントになっているというホットな話題でした。精力的な研究が行われているが、まだ因果関係がはっきりしておらず、現象の時間的・空間的スケールの大きさに改めて気づかされました。

木村講師は、最新の観測結果を元に、北海道沿岸にやってくる海氷は、アムール河口沖からやってきたものもあるかも知れないが、テルペニア湾やアニワ湾で発生したものが主流であることを示されました。海氷の面積は風による影響の方が大きくあまり変わっていないが、海氷の厚さが地元の人のお話では、薄くなってきているとのことでした。

今後も、なるべく多くの方々にご参加いただき、気象の最前線に触れるひとときを楽しんでいただければと考えています。



受講風景（札幌市青少年科学館）



受講風景（北海道大学 遠友学舎）